

クール・ストラッティーン

「ぼくの「東京今昔物語」」

大石 慶二（4組）



八期記念誌の編集をしながら書いている。

高校を卒業するまでの記憶と、八期の仲間たちと楽しく過ごしてきたこの二十年の軌跡はしっかりと僕の脳裏に甦ってくるのだけど、俗に生業時代なりわいと言われる、稼ぎながら人並みの人生を家族と共に歩いて来た「現役時代」の足跡が、なぜかおぼろげなのである。まわりの風景をみることもなく、ただがむしゃらに生きてきたからだろうか。イヤ、ただ単に振り返ろうと言っ気にならないだけかもしれない。それとも、痴呆初期症状に多いと言われる「近い過去は思い出しにくい」のだろうか、ちょうどいい機会なので花の都・東京を舞台にした昭和三十年代のドキュメンタリー物でも書いて見ようと思った。僕の東京時代は、のちにマスコミなどで「昭和の黄金時代」と言われた日本が高度成長へとひた走るまさにその時代とびつたり重なっていた。



大学に入りいちばん最初に入部したのが「シナリオ研究会」通称「シナ研」というテレビ、映画のシナリオを学ぶ部員十五名ほどのこじんまりとしたクラブだった。

一九五八年（昭和三十三年）テレビ東京で放映された「わたしは貝になりたい」は当時大変な評判で、脚本を書いた橋本忍氏は主演のフランキー堺より一何故か分からないけど一話題になった。フランスのヌーベルバーグが日本の映画界にもブームを巻き起こし、ジャンポールベルモンド主演の「勝手にしやがれ」や二枚目俳優アランドロンの「太陽がいっぱい」などが華やかに銀幕を飾った。日本でもその影響を受けた大島渚監督の「青春残酷物語」「日本の夜と霧」や吉田喜重監督の「ろくでなし」などが日本のヌーベルバーグ派と呼ばれ、もてはやされた時代だった。僕はシナ研でいろいろなシナリオの書き方の勉強をした。「ごまめみやがれ」という創作シナリオ（もどきと言っ方が正しいかも知れない）を書いたことがある。

書いている時はまだ芽の出ないいっぱしの脚本家気分でしたが、あとで読み返して見たら案につまらない作品だった。懸賞募集に応募でもしたら赤恥ものだったろう。

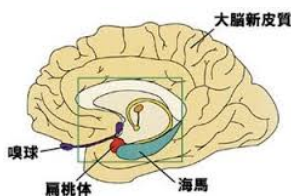
シナ研の行事で大学先輩の野際陽子さん（長島茂雄氏と同期）を訪ね、彼女がキヤスターをしていた代々木のNHKを案内してもらったこともあった。しばらく草案というか構想みたいなものを頭の中で考えていたが、やはり創作ものを書くのはやめにした。何故かと言っ今回の記念誌は読者が八期の仲間ばかりなので創作ものはうっかり書いてると誤解を招きかねない。とりわけ「三欲モノ」は危険がいっぱいである。何かのインタビュで、ある有名作家が「下半身は別人格」と言っただけと実際はそう簡単にはいかない。

数年前のこと「中国滞在記」を自分のネット上で連載した時にもひと悶着あった。ストーリーを面白くしようと架空の愛人、王雪ホウメイを登場させたら「会話や描写に実感がこもっています。うそや空想でこんなことは書けません白状しなさい」といつも近くにいる女性に詰め寄られたことがある。

まあそっいうわけで、こはは気負わずにさほど詰まってもいない大脳皮質の抽斗ひたひたの中から面白そうなるものをつなぎ合わせながら、フィクションも織り交ぜて「嘘っほいお上品な回顧録風」に仕立ててみようかとパソコンの画面と対峙している。

先日、高校時代に同じクラスにいたHMさんと電話での話のついでにそのような会話になった。彼女いわく「書いていいのよ、この年齢トキになって青春ロマンなんて却っておかしいわよ。書くなら老マンポルノよ」とポンと背中を押してくれた。

最近脳科学も進歩してきて、以前は新しい記憶は海馬かいばを通して脳内に送られると言われていたけど、実際は扁桃体へんとうたいという海馬の横にある器官からヒトの情感は脳内に送られることが分かってきた。ひとつ気になったのは、この扁桃体も年をとって感情がルーズになってくると、その働きがぶくぶり記憶をつかさどる海馬に働きかけなくなるのだという。そうなるとう海馬から脳に送られる記憶がなくなり、記憶消失にりかねない。ただよく調べてみると扁桃体を鍛え



する方法がいっつかあることがわかったとのこと。

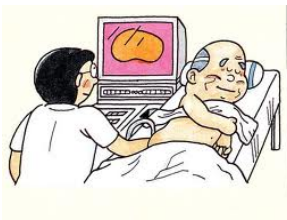
その一は、感情を「吐き出す」ことだそう。つまり怒り・悲しみ・喜び・驚きなどの感情は貯めないようにすることが肝心だと言う。第二は「鏡に向かって疑似笑い」をすること。笑い顔に扁桃体が騙されてしまい海馬を刺激するんだと言う。

でもKがいちばん気に入ったのは第三の「自然を眺め、季節の移ろいを感じたり肌で感じる」といった。つまり、こういうことらしい。のんびり野原に寝そべって遠く流れゆく雲をぼんやりとではなくしっかりと（これが大事）何も考えず集中して眺めることこそが脳に活性を与えるんだという。高齢になればなるほど毎日をおのよ様な「扁桃体を鍛える」過ごし方が大切なのだそう。

そして、大脳皮質に送られ長期保存されている記憶のなかでも特に激しく扁桃体を刺激したものに限り、年を経ても『思い出』として呼び戻すことが出来るのだそうである。耳の上の内側にあるセンサーほどのアーモンドの形をした器官である扁桃体を「強へ」「しっかりと」刺激させるために高齢者であるわれわれは大いに好奇心を働かさなければならぬのである。

お気に入りの異性―たとえば近所のコンビニのシシ娘とか―に抱かれない（イヤ抱きたい）そう願う気持ちや恋がたきに対する嫉妬の情念（ほくら世代の男性はとくに忘れていない）などなど、そのような世間ではスケベ爺いと蔑まれるようにならずに感情こそが扁桃体が大きいに刺激を受け活発に反応してくれる事象なのである。のんびりと寝そべってテレビを見ているようでは扁桃体とて簡単には反応しないことを知るべきである。

余談だけど、最近、朝のトイレ時に排尿の具合がどうもおかしい。出す時も出た後も（アを入れていいのか迷うけど）そこが痛いのである。周りも早く泌尿科に見てもらった方が良いと言う。その割に診察方法については皆、申し合わせたように口をもぐもぐとはっきり言わないので「これは何かあるのでは」と思いつつも「前立腺ガンは手遅れになるとやばい」と脅され、意を決して病院に行った。



診察ベッドで下半身脱がされて横向きに寝かされた。妙齢の

女医さんに突然お尻から手を突っ込まれた。（違つよ、それは器具です）と言っ人もいたがどうききてもあはれは縛つての感じだった。しかし、ことはそれだけでは終

わらなかつた。

次には仰向けに裸のまま寝かされ今度は若いギャルのような研修医にそこをやさしく握られ細いチューブのようなものを先から入れるのだが、それがなかなか入らないようだ。やっとぐんぐん中に入って行く、やさしいギャルの

「もう少しガマンしてくださいネー」の甘い言葉に恥ずかしさで痛かゆさが加わって、不覚にも僕のもの勝ちに反応していく。



「お若いわね」と言われたらどうなっていたらうーそうはさすがに言われなかつたけどーかわりに「もし、むずむずしておしっこを出したくなったら思いきり一気に出して下さいね」と彼女は言う。こんな状態でおしっこを（ナマコじゃあるまいし）・・・「エイッ、もうどうでもなれー」（そう思った瞬間だった）とうとう我慢出来ずにその時がきた・・・

（その間の沈黙の時間はとても長く感じた。若い研修医の白衣の胸の合わせの隙間から中村屋のアンマンのようなむちむちした大きな膨らみが目の前にあらわれた）「アラッ！すごい！全部、出ちゃいましたヨ。お若いですね。こんな方はめずらしいですよ」どんなリアクションがこの場合妥当なのか、考える間もなく僕は「アリガトウ」と答えてしまった。何でそんな応え方をしたのか後悔したけど後の祭りだった。ーそうですか？ー位が常識回答だろうけどアンマンに焦ったのかも。

余談にしては少し長くなったけど、扁桃体の刺激は最高度だった。後日談だけど友人にその話をしたら「ほくも同じことをされたけど、ほくの場合は、小さな三男坊が恐怖でチジミが上がって逆に恥ずかしかった」と小さな声で話してくれた。その後何ヶ月か置きに病院には薬を貰いに行くけど、この検査だけは二度と受けたくない。

さてKの二〇一四年は今のところ特記するほどの感動や歓喜もなければ、奈落の底に落ち込む程の心身の異常もない。幸いかナと思う反面、もしかしたら僕の扁桃体は目下お休み中かも知れない？と思うと心配でもある。なにしろ本人が思っていないくても後期高齢者の資格は明日に迫っている。聞くところによると次の運転免許の更新の時は「痴呆検査」（正しくは認知症検査）が新しく加わるのだと言っ



Kは人波で混雑している池袋東口の西武百貨店前で信号が青になるのを待っていた。大都会の暮れなずむ雑踏のなかで、目の前の景色を「コマの静止画として眺めていると、日常から解き放たれたほっとした感覚というよりむしろ孤独から来る不安感のようなものの方がより強くKの頭をよぎる。」

目の前を通り過ぎるタクシーやバスの窓から放たれる見知らぬ人々との一瞬の視線の絡み合いさえほくの平常心をゆさぶる。過ぎ去った五十数年という時の長さにはふと眩暈を感じながら交差点を渡る。Kの脳内記憶は「時空」という名の階段を一瞬で駆け下って下っていった。そしてそこで五十三年前にタイムスリップしている自分に重なる。

Kの通っていた大学は池袋の西口にあった。そのころ東口の方には西武百貨店と丸物デパートが肩を組むようにして建っていた。離れて眺めると池袋駅を挟んでその巨大なコンクリートの壁はまるで東西ドイツを遮断していたあのベルリンの壁を連想させた。一方の西口駅前はいまさらにはまだ戦後の区画整理の最中だった。駅ビルとしてあった東横百貨店以外にビルらしきものはまったく建っていないかった。三階建かせいぜい五階建の雑居ビルが雑然と道路を挟んで建っている程度だった。

駅前には「のとまん」と言って「加治木まんじゅう」をひと回り小さくしたようなふかし饅頭で有名な「のと屋」があり、店先は朝からまっしろな湯気がもうもつとたちこめていた。そしてすぐ横には今はまったく跡形もないが、当時はこの道とは別に大学への近道があった。遅刻しそうな時はよくその通りを利用した。そこは幅二mもない通路を挟んで、歯並びの悪いカバの歯のようにひしめくようにちっぴいな店が並んでいた。歓楽街によくあるスタンド看板も置けないほどの狭い路地なので、軒先にプラスチックの看板をつけ原色の赤や青色地に黒や白抜きで「奈落」とか「エデンの園」とか如何にもいわくありげな店名が書いてあった。一度店に入ったら



身ぐるみ脱がされ路地に放り出されると、善良な飲み助たちに恐がられた暴力バー通りである。

平成二十四年の夏、大学時代の親友の相本から書中見舞いのはがきが届いた。

海中写真撮影が趣味の彼のはがきは毎年、南海の珊瑚礁に群れる熱帯魚の写真で埋められたユニークなものだったが今度のはがきには外側の白枠が少し広くとってあり、そこには「来春、五十周年クラス会を計画しているからぜひ出てこないか」とボールペンで小さく添え書きがしてあった。

横の方にはもつと小さな字で参加予定者らしき名前も記されていた。書いてある名前から当時の級友たちの顔が浮かんで来たけど、それは動きや声の聞こえる三次元(立体)の世界ではなかった。Kをクラス会に導いたのは何だったのだろう。

四年間を一緒に学び語り合った、今思えばきらきらしていたあの青春時代を、一緒にかけぬけた仲間たちとの久し振りの対面だったのかそれとも、五十年前の垢ぬけのしない、でも変に居心地の良かった池袋西口の街の薫りに惹かれたのかも知れない。二十名ほど集まったクラス仲間との久し振りの対面は僕にとって、瞬時に「あの頃」に戻る程の感動的な出来ではなかった。回憶は語り合つうちに甦るものなのかも知れない。

当然のように最初の会話には戸惑いがあった。近い過去に共通の話題が無いのも理由のひとつだったけど、決してそのことで気まずい思いはなかった。それは五十年前に共通の時と空間を共有したというノスタルジックな空気がその場をすっぽり包んでいたせいなのかも知れない。

構内レストランでの会食が終わり、幹事の立てた次のプログラムなのだろう、まるで孫世代のような可愛らしい学園ギャルの案内でキャンパス内の散策をした。最後は全員で(多分我々世代なら絶対するだろう)大学のシンボル「時計台をバックに集合写真を撮った。

日もすっかり傾き、やがてキャンパスが大きな木々の影ですっぽりと覆われる頃、この次の(喜寿の日)の再会を誓いながら一何名かとは全く会話をすることもなく



一五十年振りのF組の集いは、わずか五時間足らずの再会で終わりを告げた。それでも半数の十名程が幹事の仕組んだ二次会に行くことになった。考えてみればあの頃も親しくしていたのはこんな数だったと思う。むしろ本当に逢いたい、語りたい友は（高校もそうだけど）とっくにこの世にはいない。

なつかしい二又交番前を渡り小さな路地を入ると、怪しげな看板が置かれている地下への店が。そこにはマダムシルクという文字が書いてあった。

階段を下り、ドアを開けると（昭和の池袋の夜）の香り漂うクラブが現れた。使い古された黒いソファに座り壁を眺めると、いくつかの絵画作品が目にと留まる。



中にはエロチックなものも。なぜかわからないけど、この店には言葉では表せない何かがあった。「古い海賊船のなかのくつろぎのキャビンに腰を下ろした」そんな感じだ。「名程、名前の思い出せない友がいたけど、さすがにすぐ思い出す顔ばかりだった。交わす会話はごく自然に当時呼び合っていたニックネームに変わっていた。

「もう十年後は約束できないネ。でも、もし十年後元気でいたとしたら『せめて十年で良いから後戻りして人生をやり直したい』と思うんじゃない。だって還暦に戻りたいと思うだろう？」と幹事のお泉ちゃん（元有名ホテル支配人）がアルコールで目を潤ませながら熱く語り続ける。

「今、ぼくらは十年先の未来から戻って来たんだ、そう思うとこれからの一年一年をもっと大切に過ごせるはずだよ。二十年前からはもう帰れないんだからナ」そして「あの頃」のように議論が激しく交錯する。またたく間に二時間ほどが過ぎた。

「ちょっと腹減らないか」とクロと呼んでいた名古屋の元新聞記者の提案でマダムシルクを後にした。駅前のメトロポリタンホテルでパスタと珈琲を飲みながらまた延々と昔ばなしに花が咲く。二次会ですでに酔いの回っていたオミズ（と呼んでいた小柄な女性）が「カラオケに行こうよ」としつこく言い続けるのを無視して二次会も余韻を引きずったままやっとお開きとなった。

東武デパートを抜けて東口の通路に出た時には、Kの他には女性が二人だけになっていた。そのうちの一人が「わたし、地下鉄で帰るからくくんは由子を送ってね」

と言うと、まるでふたりして申し合わせていたようにサッと消えるように去ってしまった。

「あれアレッ」という間のトランプゲームの最後に残ったジョーカーこそ、実は今日のクラス会でKがいちばん話をしたかった女性だった。彼女とは今日、初めて目が合ったときから、ふたりの視線がぶつかる度にぼくの扁桃体が震えた。でも、ほとんどお喋りしない彼女と、同じような聞き役の僕とはキャンバスを歩くときもお互い話すこともなかった。それなのに目が合う度になにか戸惑いがあり、ぶつかり合うお互いの視線の真ん中で見えない何かはげしく絡んでいた。東口の西武デパートの出口に出てきたとき突然一信号の変わり目を待っていたように――

「わたしは向いの通りから都バスで帰るから一緒に渡りましょう」

田舎から出てきた僕をエスコートするように、今日はじめて彼女が僕に語りかけた。その声はなにか僕をどこか遠い過去へいざなうようなとてもなつかしい声に聞こえた。そのときKは自分が二〇一三年の現在にいることを思いきり足で蹴飛ばしてしまったのかも知れない。意外なことが勝手に――いや反射的にKの口から出てしまった。

「エッ、もう帰っちゃっつ、急がなければどこかでお茶でも飲んでいきませんか？」同級生に語りかけるには、少し改まったことばに自分でも照れたけれど、さりげない振りをして彼女に話しかけた。それは五十年前とすこしも変わらないいや顔がちょっと引き攣ったようなスリリングなナンパの瞬間の再現だった。

五月の天気は気まぐれ、とだれか言ったかどうかわからないが、ポツポツと降りだした雨を避けるように、ふたりはロータリーを人波を縫うように歩いた。自然に身体を寄せて来た由子（よこし）はぼくの顔を覗くように言った。

「いいわよ、どうせ家に帰っても私は独りだから、なんなら泊ってもいいのよ」茶目つけたっぷりでいて何か意味ありげな彼女のミステリアスなことばとしくぐさにはぼくの扁頭体がずきずきと刺激される。五十年の時空が往ったり還たり。池袋の夜の匂いは懐かしい五十年前の青春時代そのものの匂いだった。

「二人でジャズでも聴きに行きたいな、そんな喫茶店って今頃あるのかな（おたく）知らない？」（注・あのころは「知らない」と言ったかも）

あの頃僕たちがかっこつけてよく使った二人称の呼称が一瞬間から出そっになっ

た。頭の中では『霧が流れてくむせぶよな波止場、思い出させてよくまたあ泣ける』とダスターコート襟を立てたタフガイ裕ちゃん（石原裕次郎）の姿が自分とダブった。

霧のような細い雨から彼女を庇うようにさりげなくほくは右腕を由子の肩にのせる。一瞬、彼女の肩がびくりと震えた。一もしかしたら僕の腕が震えていたのかも知れない。そして、彼女から出た次のことはがKをさらに混乱させた。

「由子は今日のクラス会を半年前から楽しみにしていたのよ。今度のクラス会にKくんが参加するって泉クンに聞いてから。半分はこわかったけどね。私のことと言つよりあの時のこと憶えているかナーと思つて一何度も目で合図したんだけど反応無しだったものネ、Kくん。何も思い出してくれないのかと思つと寂しかったワ。」

『あなただれかだよねっ』『うっへっうらひは言つてくれないかナつて……わたし待つたのよ。』『ん……』『Kくんの困つたよっな一沈黙ーシナリオ風っ』

振り向くと由子の顔がすぐ近くにあった。悩ましげな化粧の匂いが僕の顔の周りを浮漂よっていた。その香りは普段Kが接する若い中国人留学生やもっと身近な妻や娘が使っているお化粧の香りとも違った、ちよっぴり危険な都会の香りのようだった。

そのとき日めくりの卓上カレンダーがパタパタと一瞬、風に吹かれたように聞きたれたビバップの音符になってふたりの一あの頃ーに向かつて飛び出していった。

そしてまたひとつの記憶がはつきりと甦つてきて由子のそれとラインで繋がった。実は二人は必修だった近松（西鶴だったかも知れない）『演習』の同じゼミ仲間だった。学校の近くにおいしいランチを食べさせる喫茶店があり、授業が終わると昼飯食べに仲間が自然と集まった。店の名をヤタローと言った。

大型のJBLのスピーカーからは軽食堂には場違いの音量でジャズが流れていた。そこは音響につるさいジャズマニアの若者たちの溜まり場でもあった。ある日、その頃ハードバップの名手でジャズファンに絶大の人気があったソニークラークの新盤「クールストラッティン」のLPを僕が持っていると言ったら「聴きたいワ、その曲大好きなの



よ、ねえ、Kクンの部屋に聴きに行ってもいい？」と甘ったるい声で由子にせがまれたことがあった。その頃は大学の裏のアパートに一人で住んでいたけど由子はその時一人で来たのか、他の仲間も一緒だったのかはよく覚えていない。

口に出して言ったことはなかったけれど井由子はF組仲間のなかではKの一番のお気に入りの女性だった。理由は？と言われるとうまく答えられないのだけど、声、響き、もちろんチャーミングな笑顔を筆頭に彼女のすべてが好きだった。自宅は代々木上原とか言っていたがKは山の手と下町ぐらゐの棲みわけしか知らなかった。由子のイメージは「お嬢様」とより日本橋あたりの問屋の「下町の娘さん」の雰囲気だった。和歌山の清水白桃のような発育の良い胸のふくらみをいつも白いタートルのニットで隠すようにしていたー目立たない、それでいてお洒落な一着がなしが好きだった。

……Kの部屋（アパートの名前はグッドハウス2）……

ポール・チェンバースの弾くようなベースの低音域が前に出るように僕はボリュームあげた。オートファーマーのトランペットとクラークのピアノの軽快な掛け合いをつま先でリズムをとりながらふたりは一枚のディスクを繰り返して何回も聴いた。オートチェンジャー付のプレーヤーは便利だったけど、ときどきアームがディスクから滑り落ちることがあった。いつもは上手くレコードの端にカートリッジを載せることが出来るのにこの時だけはなぜか指が震えて何度やっても上手くいかなかった。粉のネスカフェを何杯も飲みながら、ふたりは長い時間、何の話をしていたのだろうか、会話の内容は全く憶えていない。でも嬉しそうに聴いている由子の腕のうぶ毛がリズムに乗って僕の腕にかすかに触れ合う度に僕の心臓は早打ちした。そこらの街でナンパした女の子ならこんな場合もって簡単に肩を抱き寄せているのに、この時の由子の肩は僕の手からとても遠くにあった。

五十年の時を経て、いまここに、あのときの彼女がいる。目の前にいる由子は「年輪を重ねてきた由子」ではなくあの頃のままの由子なのだ。僕よきとていろいろなことを覚えていてに違いない由子とあの頃に戻って話しをして見たい。でも由子はなぜミステリアスな言葉ー今ひとりだからーとつぶやいたのだろう、少し強くなった雨足と、雑踏のなかで、聞き取れにくかったけれど、ことばの意外さが僕を混

乱させた。不覚にもとっさの返事が喉が枯れて出て来ない。なぜ独りなのか？もしかしてずっと独身だった？とか。いや、ご主人に先立たれた方が普通だろう。こんな時に何か気の利いたセリフが出て来ないものか。

この意外な独白を同級生のショックとして軽く受け止めるべきか、僕は焦った。だから真面目に答えるにはとても勇気のいることだった。

遡っていた気の遠くなるような五十年前の日めぐりカレンダーを瞬時にいまに戻した僕の葛藤が始まる、ゆっくりとそして激しく。

振り向くと今夜の宿（京王プレッツインホテル）の看板の灯りは遠く後ろにけぼって見えた。「もっともっと土砂降りになったらいいのに」そんな思いが頭をかすめた。霧雨でかすんだ池袋の街をふたりはあてもなく歩いた。通り名もわからないネオン街に入ってしまった時だった、ちいさなスナックの灯りがまた一つの記憶を呼び起こした。僕は由子の肩を強く抱いたまま店の名も分からないままスナックの扉を押しした。

その年は昭和三十五年春・池袋の宵一

Kとサア坊は金も無いのに背伸びして、二又交番の近くのバー「きつつきメトロ」によく足を運んだ。七人も掛けたら満員になるほどのちいさな店だったけれど、いつも客で混み合っていた。カウンターにかけると僕は安いトリハイ（五十円）。酒に弱いサア坊はジンを少なめのトムコリンズがお気に入りだった。支払いは岐阜の織物屋の御曹司だったサア坊のおごりで、彼に何の代償をしていたかは憶えていない。四人掛けの狭い（灯りのない）ボックスが一つ、チークやマンボくらいなら踊れそうなども狭い空間があった。若いバーテンの他に二人のホステスがいた。

名前は朱美と加奈子、若い方のホステス加奈子を目当ての客が多かった。加奈子は時々甘えるとき京都弁（本人は京都出身と言ってたけど嘘っぽかった）を喋った。まだ有線放送などない時代なので、BGMはディスクプレイヤーからプリメインアンプを通したスピーカーから流れていた。

「きつつきメトロ」はいろいろな曲をお客の希望というよりスタッフの好みで勝手に掛けていた。MJQの「ジャンク」が流れたあとにマヒナの「夜霧のエアータ



ーミナル」が続くと言った感じた。サア坊のお気に入りにはナットKコールの「モナリザ」（歌もなかなかのものだった）僕はM・シャクソンとJ・コルトレーンの「バグス&トレイン」が好きでよく聴いていた。行くと何曲目かにさりげなく加奈子が掛けてくれた。

サア坊とはいろんな話をした筈だけど何もおぼえていない。話し合っているふたりの光景だけは今でもはっきり浮かんでくる。もっとも今甦って来るシーンが実像である確信はないのだが。

そんなある夜、忘れられない失態劇は起きた。やーさん（当時は愚連隊と呼んでいた。何故だか分からないけど、くれた奴らと言っ意味？）に追いかけられたのだ。「メトロ」の若いホステス加奈子が原因だった。魔がさしたのかちよっかいを出してしまった、と言っても風聞のテートに誘っただけだったけれど。

——自称二十歳の京都のお嬢さん、加奈子とはそのテートの日、池袋駅の西口で待ち合わせた。——そのころ流行りのピンク色の落下傘スカートに乳首が透けて見えるような薄黒色のブラウス。真っ赤な水玉のスカートをヘアバンド代わりに巻いていた。背は余り高くないけど、細くて形のよい白い脚に真っ赤なハイヒール姿はまるでフィギュア人形を見ているようだった。

駅の構内で彼女が僕を見てにっこり微笑まなかったらあやうく見過ごすところだった。あまり目立ち過ぎるので一緒にいるのが恥ずかしかったけれど、僕たちは西武電車に乗って豊島園へ向かった。ポートやジェットコースターに乗り、ソフトクリームとポップコーンをほおばりながらゲームを遊んだ。池袋の夜の蝶はいつしか厘の加奈子お嬢さんに変身していた。僕は子供のよういきらきらした加奈子の瞳に惹きこまれていった。

それは何かのゲームの最中に突然だった。急に加奈子が後ろから両腕で抱きついてきて僕の背中にくちびるを付けるとその熱い息をこぼに換えてつぶやいた。

「Kくん、きょうはありがとね。東京に来て初めて楽しい日だったワ」加奈子のちいさな熱い声の粒がKの背中にびっしりとこびりついた。加奈子のくちびるの感触がいつまでもほくの背中であふれていた。

ふたりは電車の吊皮をつかんだまま並んで立っていた。電車が揺れる度に加奈子

の頭が僕の肩にもたれ、僕はそっと加奈子の肩を抱いた。

—その晩に、事件は起きた—良いことと悪いことは交互に起こるの？

その頃Kは北池袋の個人宅の離れのアパートに住んでいた。女の声が玄関の方から聞こえた。加奈子の声に聞こえた。続いて男の声、あきらかに恫喝めいた声だ。にせ京娘のヒモがてっきり自分を脅しに来たと思った。

玄関で大家さんともめているように感じた瞬間には、Kの脳は思考を飛び越え身体に瞬間的に反応していた。

深夜の住宅街を闇を抜ける忍者のように裸足で駆け続けた。どこを目指して走るでもなく、曲がり角に来たら右に左にと無我夢中で駆け抜けた。目的はただ遠くにいる気持ちだけだった。時々耳を澄ませるけど、聞えるのは自分の心臓の鼓動だけだった。アパートに戻るまでの一時間以上、深夜の街を彷徨^{さまよ}っていた。まるで僕は夢遊状態にあったのだろうか、この晩に起きた出来事はもしかしたら幻想か夢だったのかもしれない。なぜならプロログの激しさに較べ、この事件のエピログ(結末)は記憶からすっかり消えてしまっているのだから。

脳は嫌な思いは消してしまうのだろうか。脳にファイルされているのは加奈子と豊島園に行ったこと、そしてその晩、必死で逃げ回ったことだけである。

ひとつ気になる記憶の忘れものがある。それはリズムカルなフリースが逃げるKの足音に合わせて耳に残っていることだ。その後バー「きつつきメトロ」に行った記憶もない。でもいまでもマヒナの裏声コーラスをバックに松尾和子の唄う「誰よりも君を愛す」が流れてくると、あの日の加奈子の熱い吐息で僕の背中がうずいてくる。脳は扁桃体を通して五感だけをファイルに仕舞うのかも知れない。

—あの頃のKのアパート生活を思い出して見ろ—

生活費を削る為には食費の節約が絶対条件だった。かきあげ、コロケは二十円、メンチ三十円、白菜十八円、卵二十五円、などが主な惣菜だったけど、金欠病になると小さな袋に入ったマヨネーズを鉄で角を切って熱いご飯に絞りに出して食べた。

お腹を満たす為に糸で結んだソーメンの束を大きな鍋に放り込み、味噌汁と混ぜてごはんにかけて食べた。今でも冷しソーメンが食べ残ると味噌汁ソーメンご飯に

かけて食べたいと思う。

学生時代の引越は学生援護会の軽トラックで充分だった。それでも「ちょっとしたものを」持っていた。ひとつは秋葉原で買ったビクターのステレオ。二台のスピーカーを挟んで真ん中にピックアップ型のプレイヤーが鎮座した横長の一体型ステレオである。MJQやアートブレーキーのディスクを中古レコード店で見つけてきてはよく聴いていた。

もう一つの財産は丸井で買ったフランスベッドだ。折りたたむとソファ二台になる当時としては最新の品だった。でも四畳半一間にステレオを置いてフランスベッドを置くという構図はどう考えても無理があり、何度目かの引越しの際に処分してしまった。そして、後に残ったのは月に一度の(実際は居留守を使うので度々の訪問になる)丸井の集金人の恐怖の来訪だった。アパートのドアの外で「丸井ですー」と叫ぶ声があると物音を立てずに居留守を使う。月賦屋の執拗なる連呼とKとの長い我慢比べの息の詰まるような戦いが延々と続いた。

—平成二十五年五月— Kと由子は霧にむせぶ池袋の街をあてもなく歩いていた。

時折ふっと吹いてくる風が由子の長い髪をなびかせる。もう雨はすっかりあがっていた。由子のつけている香りに酔いながら僕は由子の手をしっかりと握りしめ歩いた。由子の帰る池袋東口の都バス駅の駅の方へ向かって。その間にはKの泊る京王蒲田も近づいてくる。Kの動悸がなぜか少し早くなっていった。黙って駅まで送ろうかーそれともー言うことは決まっているんだけど、なかなか口から出ない。もしかしたら由子も同じことを考えているかも知れない、フトそういう気がした。そう思うとますます・いつもそうなのだ。「Kくん、ちょっとわたしに電話してくれない?」そのとき突然、思い出したように由子がつぶやいた。

「えっ、どうして?」僕はスマートフォンをポケットから出し、彼女の言う番号をディスプレイに叩く。しばらくもしないうちにあの軽快な、確かに聞き覚えのある携帯の着メロが、由子のショルダーバッグの中でちいさく鳴っていた。

クールストラッティンの軽快な繰り返しイントロが、ふたりのところを紡ぐ細糸のようにいつまでも鳴り続けていた。加奈子のひもから逃げて深夜の街を走ったとき、耳に聞こえていたメロディに似ていた。



メモリアル・東京(TOXICO)一九六〇〜一九六三(昭和三十五年から三十八年)：いろいろなアルバイトを経験した。いちばん長く続いて面白かったのは二年くらい続いた芸能プロダクションの派遣のアルバイトだった。

ラッキープロと言う小さな派遣会社で社長自らエキストラをしていた。バイト料が八百円と他に較べると高いのも惹かれた理由だけど、それより魅力だったのは夜中に弁当が出ることだった。テレビ東京、日本テレビ、NEC(今のテレビ朝日)とどこへでも出かけた。その頃はビデオ撮りが普及し始めたばかりだったので撮影は深夜が多かった。

ドライリハーサルから始まってカメラハスとして本番と、夕方からTV局に入り夜中の三時頃に終るのが普通だった。深夜の東京の街を有名な俳優さん達とタクシーに相乗りで帰ることも多かった。通行人から兵隊、犯人、クラブのボーイなど何でもした。

NHKの朝ドラ(娘と私)や事件記者、特別機動捜査隊、夢で逢いましょう等等。特に思い出は当時の人気番組だった「ママと良江とひで坊」というバラエティ番組で、ママとは新派の初代水谷八重子、ひで坊こと白木秀雄は水谷良江と新婚ほやほやだった。三人とは楽屋で何度も話をする仲になっていた。



彼は裕次郎の「嵐を呼ぶ男」の裕次郎扮するドラマーのオフレコをした。ほどなく二人は別れたが白木の最後は悲惨だった。麻薬におぼれ、アパートの一室で腐乱死体で発見された。

この後、一年半の美容学校(夜間)通いと並行して、風間は都内の美容室での見習い修行に明け暮れた。そこは高卒でさえエリートと言われるぐらいの世界だった。徒弟制度がやっと思直され、それまで女中に近い修業を強いられた中卒の見習いたちがやっと思直された横文字のビューティアシスタントという名前だけは如何にもしゃれた地位を得たところである。

大学卒のKは、当時日本一と言われたキヨシ美容室でも珍しい存在だった。オーナーの石渡潔は全国美容師の憧れの存在だった。華麗な手さばきと話術は講習の度に参加した美容師のため息で会場はいつもどよめいていた。

大久保の真野美容学校を卒業して、一年半の修業時代は楽しいことも、苦しいこといっぱいあった。まさに、井上ひさしの「ひよっこりひよつたん島」の歌の通り

の人生だった。そしてそれはKの生業人生まひつじんせいのプロローグであると同時に、Kの『わが青春のエピローグ』でもあった。

♪くるしいこともあるだろさ ♪かなしいこともあるだろさ

♪だけど僕らはくじけない ♪ひよっこりひよつたん島

どこまでいっても あすがあるホィ、

♪ひよつたん島はどこへいく、♪僕らをのせてどこへゆく

♪まるい地球の水平線に ♪なにかがきみを待っている」



・・・ところで、先日一通の封書が我が家に届いた・・・

裏には住所はなく、的井由子と名前だけが小さく書かれていた。いつも同級生からの手紙は妻に中身を読んで聞かせていたことを後悔した。『あせらない、慌てない、こんな時こそ平常心を』と、その晩Kはベッドの中でその手紙を読んだ。そのミステリアスな手紙を披露しよう。

一五十年目の同窓会であなたに会えて嬉しかったワ。そして、五十三年前のあの日「遅いから送ってあげるよ」って私を駅まで送ってくれたことを思い出してくれてうれしかった。あの晩、二又交番を過ぎた細い路で変な男たちに取り囲まれ、わたしが無理やり連れて行かれそうになった時、あなたが必死で私の手を握って離そうとしないやくざの手にかみついて振りほどき、駅まで必死で走ったこと、あなたの顔を見たら恐怖で真っ青だったの。改札口に着いた時二人の手は握られたまま固まっていたのよ。関節が元に戻らない。でも泣きだしたい気持ちと裏腹に「家に帰らずにこの絡った手のままで一緒に居たいって」私の心は葛藤していました。もしあなたが「怖かったらほくの部屋に泊ってもいいんだよ」と言ってくれたら黙って「うん」うなずくつもりでした。あのと



きはKくんと一緒にいたかったの。でも、泊っていたらきびしい父が一晚中かかっても捜し回ったかも知れませんか。結局、私は帰りました。そのあと何故なのか、あなたは急にわたしに対してよそよそしくなってしまうました。そして二度とふたりの紐が絡むことはありませんでした。私は会いたいと心の中で思っていたけど何も言えなかった。あなたに「無視されてしまったの、何の理由も分からないままに、わたしはずっと待ってたのに」

それから五十三年目のあの日の再会でした。神様がわたしの願いを聞いてくれたのかも知れません。あの晩、「泊っても構わないのよ」とわたくしは言いました。五十三年前に言いたくても言えなかった胸の中に秘めていた「ことば」でした。五十年経ったのですものね「だまって私をどこにでも連れて行ってくられてよかったのに」あなたは五十年前とちっとも変わっていませんでしたね。「こわい父もいなかったのに……ね」……

・手紙はここで終わっていた。一枚目の三行目だった。あとの広い空白には目に見えない透明の文字で、びっしりと由子の想いが、埋まっているのが僕には読めた。そして僕にはわかっていた。彼女がほんとうは何を言いたかったのか……**Kの考察**――

的井由子と五十三年前のあの夜、別れて以降どうして彼女に冷たくなったのか、何故避けるようになったのかは今は今なら分かるような気がする。たぶん「格好つけてほくの方も待っていた」のだと。別に避けていたわけではない、うまく言えないうけどそれは由子とほくの愛の差だったのかも。つまり相手が自分のことをどう思っているかなどあまり考えてはいなかったのではないか。いま振り返って見ると「今」幸運を掴めるかもしれないと言っ、「ここ」一番のチャンス的一步手前で僕は「いつも躊躇」してきたような気がする。「慎重」といえば聞こえがいいかもしれないけど「現状放棄、つまり張の合わずに逃げてしまっ」思い出すと悔いの残ることばかりだった。

そういえば子供のころから僕は「答えは分かっていたのだけ」教室では手を挙げない子供だった。いろんなことが走馬灯のように頭の周りを駆け巡る。でも「僕は思う」無理はしなかった。と。半世紀が経った今、ぼくは寛容「許容」の範囲がとても広い性格に変わって来たような気がする。格好よく言えば、人と接する時いつも「相手側の立場になって物事を考えるようになった。つまり」ぼくがあなただったらどう思う?どうして欲しい?って、その為に一時としていい加減なと言われる「寛容」は相手に対する思いやりなのだと思うている。

……**こんな夜は頭を駆けめぐらして……**……**中。**

近くでパトカーのサイレンの音が聞こえる。都会の真夜中の繁華街にいるような気がする。サイレンはごまかすことも細くながく僕の耳のなかで鳴り続けていた。やがて僕は深い眠りのなかに引き込まれて行った。

二〇一三年五月「そこは未明の池袋京王ブリックインホテルの四階……まだ夢の中。

朝あけのまどろみのなかで聞きなれたジャズのメロディーが流れていた。始めは小さく短く、まるで傷の付いたコードのように、同じフレーズを何度も何度も繰り返して、心地よい音符だけが勝手に風に吹かれ漂っていた。

その音とは別におぼろげだけでもうひとつの音が交差するように聞こえていた。一僕の腕の中でスヤスヤと眠る由子の寝息が聞こえた。僕は無意識に由子を抱き寄せ腕の中にしっかりと抱きしめた。そして僕は眼を閉じたまま記憶の中の由子に想いを巡らせていた。一枕もとに置いていたスマートフォンが目覚まし用のアラームが徐々に大きくなっていく。あの聞きなれたクールストラッティンの軽快なトランペットのリフレインが流れている。僕は夢の中で何を見て、何を聞いたのだろうか。一京王ブリックイン四〇三号室「眠りから覚めた僕は、まだ半分はぼんやりした夢の中を彷徨っていた。

一五月の朝の陽光がきらりと光る水晶のようにまぶしくベッドを照らしていた。

《書き終えて》

眼が覚めて見ると支離滅裂な話は何の不思議もない一本の筋として繋がる『ありふれた夢』物語として書いてみました。考えてみれば私たちの人生も終わってみれば「長い一夜の夢」なのかも知れませんが、いまだ煩惱にさいなまれている今、現在の「思い」と、過ぎ去った甘酸っぱい「思い出」をひとつの文章として「しかも『手紙が届く』という「未来への夢想」までドッキングさせて書いてみました。でも寂しいかな、こんな夢見の愉しみも最近はめっきり少なくなっています。

《お仕舞い》 脳の話は少なくて僕の『東京今昔物語』を終わろうと思う。

(い)くら扁桃体は年をとらないとはいえず、私達はいささか遅きに失した感否めない。ボケないで今の状態を維持する為に欲を小さく持つことにしよう。仏教で言うところの小欲知足である。その為にも扁桃体トレーニンクだけは欠かせない。鏡と「こめ」を置いて日に数回、満面笑いを鏡に向かってする。最初に書いた「二番目の秘策である。強い情感は得られないかも知れないが、こころはさほど難しくしてではない。そのかわり決して他人に見られないことを祈っている。(

◎ちなみに「クールストラッティン」とは、カッコよく歩くという意味です。